

震災瓦礫について考える

最近の新聞やニュースでは、震災瓦礫の広域処理のための受け入れが問題になっています。札幌市は早々に受け入れ反対の声明を出してしまい、検討することさえできない状態です。

北海道は各地の市町村にお願いをしていますが、なかなか大変なようです。マスコミもこの問題には神経質になっており、反対の場面を中心に報道しているように見えます。

北海道は東北の出身者が多く、私の先祖も岩手県からの開拓者です。反対の内容を考えて、本当に問題なのかを調べてみました。

瓦礫の広域処理により放射能が拡散する、処理施設を地元建設しそこで処理すべきだ、放射能が処理施設に蓄積濃縮し外部に飛散する、内部被ばくの危険性が非常に高い、などが反対の理由で取り上げられています。

よく理由もない反対のための反対の人もいますが、反対理由の分析を見てみると、広域処理の対象になっているのは放射能汚染の少ない岩手、宮城の瓦礫であり、さらに線量を測定したうえで受け入れるので汚染の拡散が全く考えにくく、処理施設も地元にも建設されていますが、新しい大きな施設をつくるのは時間もかかり、瓦礫の量も両県とも10年以上の量が溜まっているため処理にも限界がある、瓦礫置き場が地元からなくならないため復興復旧がすすまない、また瓦礫受け入れが住民の内部被ばくの上昇に結びつかず、さらに環境放射を防ぐ手段もとられている、など問題に対してはしっかり対策がとられているようです。

現在は東京都、神奈川県、静岡県、東北の各県、さらに北海道などが実際に受け入れ処理をしたり、これからの受け入れを検討しているようです。科学的にも人体に影響がなく、常に線量を測定し情報を開示するなら、瓦礫の処理に理解を深め、皆で協力できる体制にしたいものです。
(サンク)

大通公園を望む窓辺から

地域医療を守るヒント

4月、神戸で行われた学会に参加した帰り、兵庫県立^{かいばら}柏原病院に行ってきた。2月に開催した北海道医師会主催の平成23年度「医学生・研修医と語る会」のテーマを【地域医療再生へのアクション】と決め、柏原病院小児科部長の和久祥三医師に講演をしていただいたが、その“県立柏原病院の小児科を守る会”の活動を実際に見てくるのが目的だった。

福知山線で約1時間半、満開の桜の中に建つ木造の素敵な駅に降りた。土曜日の午後というのにとっても静かで、遺跡も見つかっている古い地域である市内は店も少なく、食事処をやっと探して入った。「どこに行かれますか？」と女将さんに聞かれ、柏原病院と答えると、小児科医が撤退するのを地域ぐるみでとどめたこと、地域医療を守るためには住民が主体的に動かなければならないこと、ルビコンの決断(テレビ東京)というテレビドラマのモデルになったこと、野田首相が訪問したことなど、流れるように話してくれた。そして、病院は遠いので車で送りましたよと言ってくれ、着物姿のままハンドルを握り、病院まで送り届けてくれた。

柏原病院は、なだらかな山に囲まれ、時折の風で桜吹雪が舞う小高い丘の上にほっこりとあった。丸い穏やかな顔の和久先生と子供連れの「守る会」のお母さん、すすんで赴任した若い女性小児科医たちが迎えてくれた。交歓会では、小児科医が地域にとどまってくれるために、守る会がとった具体的活動を、代表の方がスライドを交えて説明してくれた。署名運動から始まり、『コンビニ受診を控えよう、かかりつけ医を持とう、お医者さんに感謝の気持ちを伝えよう』の3つのスローガンを掲載、市民向けの受診マニュアル、電話相談などを今も実践し、夜間救急は半減したという。地域医療を守るためには行政任せではなく、地域住民の主体的な活動が必須であることを、同じ人口ながら兵庫県の10倍の面積を持つ北海道でどう広げていくか、課題は大きいと感じた。
(はやぶさ)